



世界に知られる有松鳴海絞

多彩な技法をいまに伝える絞の技

徳川家康が天下を統一するや、すぐさま着手されたのが東海道の整備でした。鳴海は東海道の40番目の宿場として整備されました。人家のなかった有松にも人を住まわせ、近隣の治安の向上を図りました。当時は荒地地のうえ、確たる産業もなかった有松で移住者の一人である竹田庄九郎をはじめとした8人が木綿に絞染めを施した手拭などを旅人に土産物として販売し、好評となりました。

その後、尾張藩の保護を受けたこともあり、有松絞は発展をします。周辺の鳴海、大高などでも絞染めがおこなわれるようになっていきます。明治23年にパリでおこなわれた万国博覧会にも出品し、世界の注目を集めます。

絞染めは布の一部を糸で縛ったり、縫い締めたりするなどし、染料が染み込まない部分を作ってさまざまな模様を描く染めの技法です。絞は江戸時代から明治にかけて100種類を超える絞技法が開発されましたが、いずれも高度な技術を必要とします。細かな幾何学模様から複雑な花模様なども描き出します。絞の技法そのものは世界中にあります。日本の絞が最も多彩で繊細な技法だといわれています。



技術者養成と新商品の開拓

昭和20～30年代にかけて、この地には10万人の絞職人がいるとされるほど、絞が盛んでした。ところが外国で絞がおこなわれ、それが輸入されるようになったため、伝統産業である日本の絞を守ろうと有松、鳴海、大高の各産地の組合が話し合い愛知県絞工業組合を設立しました。絞は細かな手作業を伴い、簡単に機械化することが困難です。しかし、機械化が困難であることが、かえって大企業の進出を防ぎ、伝統産業として生き残ることができたともいえます。ただ、絞の作業は根気を必要とし一朝一夕で簡単に修得できる技ではありません。

伝統工芸品である有松鳴海絞の技を次代へと継承するため、組合では伝統工芸士が直接指導して技術者育成に取り組んでいます。技術を習得したいという人がたくさん参加しています。組合はこれまでの伝統にこだわるだけでなく、絞を使った新商品開発を通し、未来に向けての新しい伝統の創造、需要の開拓などにも積極的に取り組んでいます。



DATA ■愛知県絞工業組合

所在地：緑区有松3405番地

- ・慶長13年（1608年）：有松に竹田庄九郎以下8人が移住し村をつくる
- ・明治23年：パリ万国博覧会に有松絞を出品
- ・昭和42年：有松、鳴海、大高の各産地の組合が話し合い、愛知県絞工業組合を設立
- ・平成4年：第1回国際しぼり会議を開催